

京都大学	博士(文学)	氏名	菅 原 祥
論文題目	社会主義的近代におけるユートピア的想像力の文化社会学的研究 — 社会主義およびポスト社会主義のポーランドにおける表象と記憶		
(論文内容の要旨)			
本論文は、社会主義およびポスト社会主義時代のポーランドを対象として、その前半部では 1950 年代の「雪どけ」と呼ばれる時期における社会的想像力のあり方を、当時の映画表象を通じて分析すると共に、後半部では、社会主義時代の記憶がポスト社会主義の現在においていかに位置づけられているのかを、ポーランドのかつての「社会主義都市」ノヴァ・フータでの調査から明らかにする。これらの作業を通じて本論文は、社会主義時代のポーランドに存在した「ユートピア的想像力」の現代的な意義を検討すると同時に、社会主義体制崩壊後の現在における、新たなユートピア的想像力の再生の可能性を論じる。 「序章」においては、本論文の 2 つの目的およびそれに対するアプローチの方法が説明される。本論文の第一の目的は、かつての旧ソ連・東欧圏の社会主義体制に新たな光を当て、とりわけそこにおける「反体制的」と言われたような想像力のあり方を、現代において今なおアクチュアルな意義を持つものとして再評価することである。こうした観点に基づいて、本論文前半部(第 1 章～第 4 章)では、ポーランドにおいてそうした「反体制的」といわれるような想像力や言説が噴出した時期であるとされる 1950 年代の「雪どけ」の文化状況を、特に「映画」というメディアを通じて明らかにする。 第二の目的は、社会主義体制が崩壊した後の社会状況の中、かつての社会主義時代の「過去」に関する記憶や言説がどのようにとらえられ、またそれが現在のポスト社会主義における人々の生とどのように関わっているのかを明らかにすることである。こうした観点から、本論文後半(第 5 章・第 6 章)ではポーランドにおけるかつての「社会主義の町」、ノヴァ・フータでの文献調査・インタビュー調査から得られた結果を呈示する。 これら二つの目的を繋ぐものとしてここで導入されるのが、「ポスト・ユートピア」という概念である。本論文においてこの語は、ユートピアの試みがもはや完全に終わったということを前提としつつも、それでもなお過去の失敗したユートピアを再考し、そこに新たな光を当てることで、現在の支配的秩序に対するオルタナティヴを見出していくような、ある種の創造的な想像力のありかたとして用いられている。この概念を導入することによって、上記の本論文の 2 つの目的は、互いに関連付けられてより大きな枠組の中で論じられることになる。 第 1 章 ポーランドの「雪どけ」：社会的想像力の変容 第 1 章では、後に続く章で詳しく論じることになる「雪どけ」期のポーランドにおけ			

る文化変容の概略と、その特徴的な側面について予備的な考察を行うため、「雪どけ」期において人々の意識がどのように変化したのかを示す代表的な言説である「女生徒の日記」を紹介し、当時においていったいどのような想像力のあり方が問題になっていたのかを明らかにする。

第2章 「雪どけ」と性愛の表象：映画『地下水道』を中心に

第2章・第3章は、それぞれ当時の「雪どけ」の文化状況において社会的な注目を集めていたトピックを取り上げ、映画におけるその描かれ方を論じる。第2章では、アンジェイ・ヴァイダの映画「地下水道」を中心に、当時のポーランドにおける性愛関係に関する想像力の変容を検討する。ここではとりわけ個人的な性愛とそれを越える国民的な「大義」との対立関係が大きなテーマとなる。

第3章 「雪どけ」と非行少年へのまなざし：映画における「ちんぴら」像

第3章では、当時のポーランド社会における「非行少年」のイメージを、ドキュメンタリー映画を中心に検討する。「非行少年」という存在は当時の社会的想像力の中で、既存のスターリニズムの意味秩序を崩す可能性を持った理解不可能な「内なる他者」としてまなざされていたが、こうした非行少年の理解不可能性は、既存の秩序の中に整合的に収められてしまうことによって、徐々に弱まっていくことになってしまったのである。

第4章 ドキュメンタリー映画と「現実」：ユートピアとポスト・ユートピア

第4章は、当時のドキュメンタリー映画における世界観の変化について論じることを通じて、これまでの3つ章の議論をとりまとめ、本論文後半部へと接続する役割を果たす。この章が試みるのは、これまで論じて来たような「雪どけ」の新しい想像力が、それまでの社会主義建設のユートピア像が揺らいだ後にそれに代わる新たな価値を希求していたという意味で、本論文が言うところの「ポスト・ユートピア」的な想像力であったと規定しなおすことである。

第5章 社会主義的ユートピアの理想と現実：製鉄都市ノヴァ・フータの歴史から

本論文後半部をなす第5章と第6章では、ポスト社会主義のノヴァ・フータをめぐる記憶と言説の分析へと移る。1949年にポーランド最大級の製鉄所およびそれに付随する町として建設が始まったノヴァ・フータは、「ポーランド最初の社会主義の町」として、未来の理想社会を体現する都市となるはずだった。第5章は、こうした社会主義時代の「ユートピア都市」としてのノヴァ・フータのありかたについて、1949年の建設開始から89年の体制転換までのノヴァ・フータをめぐる代表的な言説を紹介する。

第6章 ポスト社会主義期におけるユートピアの記憶：ノヴァ・フータでの調査から

1989年の体制転換と共に、ノヴァ・フータは「社会主義の遺物」として非常に否定的なイメージを担うことになった。さらに、体制転換に伴う住民生活の急激な変化により、人々は新たな形の苦難をこうむることにもなった。第6章では、ポスト社会主義のノヴァ・フータを舞台に、社会主義の過去の記憶がそこに生きる住民たちの間でど

のような意味を持っているのか、そして、過去を創造的に再解釈することが現在においてどのような新たなオルタナティヴを切り開いていく可能性があるのかを論じる。

終章：ユートピアの過去に寄り添うということ

終章では、本論文のこれまでの議論を総括した後、とりわけ本論文が行なってきた「雪どけ」の過去をポスト社会主義の現在に「重ね合わせる」という試みについて詳しく論じる。本論文が行なってきた過去と現在の「重ね合わせ」には、2つのレベルが存在する。第一のレベルにおける重ね合わせは、過去と現在の間に存在する類似性・共通性に基づくものである。すなわちそれは、それまでの「社会主義建設」というユートピア像が揺らいだ「雪どけ」の時期を、社会主義体制が崩壊し、ポスト社会主義へと突入した現在のポーランドと共通の想像力のありかたを持っていたものとして論じる試みである。逆に、第二のレベルにおける重ね合わせは、両者の間の「差異」に基づくものである。そこでは、「雪どけ」という現在とは異質な過去が、ポスト社会主義の「現在」の上にあたかも二重露出のように重ね合わされ、「現在」との差異を際立たせることで、「現在」における支配的な意味秩序の根本的な偶有性とその転覆可能性を明らかにするのである。本論文は、これら2つの「重ね合わせ」を通じて、現在において新たなユートピア的想像力を見出すことを目指すと同時に、現在の支配的秩序に疑問を呈し、新たな視野からの捉え直しを可能にしようとする、ひとつの実践の試みである。

(論文審査の結果の要旨)

本研究は、社会主義建設期と崩壊後というポーランド社会の二つの時期に着目し、それらを「重ね合わせ」ることによって、そこで生成される「ポスト・ユートピア」的想像力の可能性から、モダニティ研究に新たな地平を切りひらこうとする文化社会学的な論考である。それはまた、2005年から2011年にかけて30ヶ月におよぶ長期のフィールド調査にもとづいて作成された、社会主義社会建設の集合的記憶とポスト社会主義社会のなかで揺らぐ社会意識に関する貴重なモノグラフ的研究でもある。

本研究の社会学的意義は、20世紀におけるモダニティのもう一つの表出形として、ユートピア志向を核心とする社会主義モダニティのもつ特質を、「ポスト・ユートピア的想像力」という概念を導入して解明した点にある。本研究は、ユートピア建設が「不発」におわった時点において、かつてのユートピア的経験と実践を（懐古や嘲笑とはまったく別の回路で）再想像することによって、現前する秩序を揺さぶり新たな希望や価値を創出するメカニズムの萌芽を「発見」する。この点で、西欧型モダニティとは明確に異なる性格を有することを説得的に明らかにした。

本研究は、リベラリズム、市場主義、個人主義を基幹とする北米・西欧型モダニティを主な対象としてきた、これまでの20世紀モダニティ研究の視野の外に追いやられてきた、社会主義の実験を、ユートピアを志向するもう一つのモダニティの回路として定式化した。そのうえで、ユートピアの実験が不発におわったときに発動される、過去を多面的かつ動態的に再構成するポスト・ユートピア的想像力を様々な状況ごとに細かく分析し、社会編成と価値創造の可能性を具体的に解き明かしてみせた。

本研究は表象編と現実編という二部に分かれる、第一部は、1950年代のポーランド社会に出現した「雪どけ期」の映画や雑誌を対象にして、社会主義（ユートピア）建設の公的言説からはみだした生に埋め込まれた「ポスト・ユートピア性」の解明に向けられる。第二部は、1990年代のポスト社会主義時代において、かつて社会主義建設の象徴だった都市ノヴァ・フータにおける社会主義時代と現在の生活世界の実相が、住民の声と観察を通して再構成される、そこからポスト・ユートピア的想像力を通して、新しい世界と希望（あるいは絶望）が生み出される過程が分析される。

第一部の表象文化の分析では、『新しい文化』誌に掲載された「女生徒の日記」と『地下水道』『ちんぴら』という雪どけ期のポーランド映画がとりあげられる。これらの作品が社会に発信した「プライベートな内面の吐露」「戦闘のさなかにおける性愛」あるいは「社会主義の大義から逸脱した非行少年」といった題材は、これまで、スターリニズムに対する自由主義的な（日常的）レジスタンスの文脈に位置づけられてきた。それらは、個人主義、自由恋愛、あるいは社会主義体制の矛盾として、体制対反体制、社会主義対自由主義という構図のなかで理解されてきたのである。しかし本研究において、著者は、こうした平板な配置を批判して、ここで焦点化されている個人の内面、濃密な性愛、虚無的な非行少年表象を、たんに自由主義への羨望と社会主義からの逸

脱としてとらえるべきではないと主張する。著者が強調するのは、いったん社会主義建設というユートピアへの動員と関与を経験した生の主体が、その不発や失敗を感じたり体験したりすることを通して、過去のユートピアを創造的に再想像するという可能性である。その再想像によって、自由主義への傾斜でも社会主義への嫌悪でもない、新たな世界（秩序）への回路が開かれていることを、当時の文献資料やインタビュー記録の精密な分析を通して明らかにした。

第二部における舞台は、1949年に社会主義の象徴として、クラクフ近郊に建設が開始された巨大鉄鋼コンビナートの町ノヴァ・フータである。この町は、かつては社会主義が保障する豊かな生産と生活の広告塔であり、同時に、非行や売春などが横行する社会主義の暗部としても表象されてきた。また1980年代には反体制の「連帯」運動の拠点として政治化していった。こうした歴史を経験し、今日、緩やかに衰退しつつあるノヴァ・フータに暮らす住民の声について、本研究はまず、ポスト社会主義社会に典型的な二つの語り口にしたがって紹介する。一つには、かつての社会主義統治の官僚的で非人間的な制度や思考を憎悪・非難・嘲笑するものであり、もうひとつは、社会主義時代の友愛と平等をノスタルジックに回顧する語り口である。しかし本研究はこの次元にとどまらず、さらに進んでこの二分法を斥け、同じ語りのなかに、かつてユートピア建設を体験し、その不発（失敗）を経験することによって、今、過去を郷愁でも嘲笑でもなく再構成しようとする意識を「発見」する。具体的には、かつておよび現在のノヴァ・フータ住民のライフストーリーや、彼らの中から生まれた映像による過去の再構成プロジェクト、さらには新しい実験的都市ツーリズムなどの実証的で緻密な調査によって、新しい世界と希望を創出する可能性の萌芽を提示することに成功したのである。

本研究は、モダニティ研究において社会主義社会の実験が示したもう一つのモダニティの可能性を、ポスト・ユートピア的想像力という視角から光をあて、新たな地平を切りひらいた点で、きわめて優れた研究といえることができる。

とはいえ本論に問題がないわけではない。第一に表象編と現実編の接合（重ね合い）は、より大きな枠組の提示と細かなデータによって理論化されるべきで、本研究の接合はいささか直感的な面があること。第二にポスト・ユートピア的想像力のもつ可能性について、本研究が提示しているのは可能性の萌芽にすぎず、これが結局のところリベラリズムに包摂され新たな世界の創出には結びつかない可能性についての検証が欠けている点などは疑問として残る。しかしながら、こうした点に対して著者は十分自覚的であり、今後の研究の進展のなかで解決されるべきものである。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2012年5月23日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。